

郷土博物館・文学館だより

第16回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

16回目を迎えた平成27年度は、33名から122首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館に特別展示されました。また、5月11日には渋谷区役所第三庁舎会議室にて表彰式が行われました。

平成28年度は6月から短歌の実作を中心とした文学講座「短歌を詠もう」を開講しています。

なお、第16回渋谷現代短歌をもちまして、逸見久美先生が選者の任を退かれることとなりました。永らくの間、本当にありがとうございました。

今後も「短歌の街・渋谷」を目指し、様々な活動をしてゆきますので、ご期待ください。

第16回 渋谷現代短歌入選者表彰式



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十六回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

【優秀作】

清正の井に湧き出づる澄みし水

日に映えて流れゆくなり (大熊 順三)

夕焼けの代々木の空を凜と舞う

すずかけの葉は銀の大鷲 (大庭 香江)

電飾のまばゆき程に輝やきて

一二六の碑けふも供華あり (新谷 房子)

これいいね新しくなった駅のチャイム

初台駅のくるみわり序曲 (山田 仁枝)

またひとつ駅前ビル壊されて

渋谷の空が広がってゆく (吉田のぞみ)

【佳作】

上智町、広尾と名を変え五十年

名残り求めて路地をさまよう (大塚 洋子)

松濤の池のさざ波金色に

遙か古代のいのりの色に (金井 節子)

そのかみは武士渋谷氏が治めし地

今渋谷区民の自治体なりき (金子佐知子)

原宿のイルミネーション煌めきて

いと高き空の星と競いぬ (北村 早苗)

一人去り二人三人減り行きて

まだ来ぬ人を八千公と待つ (高久 芳樹)

玉川上水新水路

現在の西新宿は東京都庁をはじめとする高層ビル群が林立し副都心として有名ですが、この場所にはかつて淀橋浄水場がありました。淀橋浄水場は明治31年(1898)に竣工し、昭和40年(1965)に廃止されるのですが、どうして浄水場がつくられたのでしょうか。

江戸時代の初め、江戸市中は武士をはじめ町人などたくさんの人たちが生活するようになり、慢性的な水不足となっていました。これを解消するためにつくられたのが、玉川上水です。承応3年(1654)、多摩川の羽村から四谷大木戸までの43kmを、約8ヵ月という短い時間で、庄右衛門と清右衛門の兄弟が完成させました。

また、この玉川上水は本来上水ですので飲み水として使われましたが、分水をし、その水を農作業に使ったり、水車をまわして米をついたりひいたりする人たちもいました。

やがて明治になると、江戸幕府が認めていなかった船による荷物の運搬が許可される(明治3年、2年後に禁止)など、管理がずさんになり、玉川上水の水質は悪化するようになりました。それに加えて明治19年にはコレラが大流行し、飲み水を供給する上水としての衛生面での問題が浮上したのです。

そこで考え出されたのが、淀橋(角筈)に水をろ過できる浄水場を建設する案です。

淀橋浄水場には、玉川上水の水を代田橋から引くことが決まり、新しい水路を建設することになりました。新水路のルートは、代田橋から代々幡村(現在の笹塚・幡ヶ谷・本町付近)を横切り淀橋に向かうもので、全長約4kmに及び

ものでした。工事は明治26年から始まり、明治31年に完成しました。新水路は土を盛ってつくった堤状のもので、開架の水路でした。水路には、人が通行するために淀橋浄水場側から15の橋が架けられたほか、本村や本町には隧道(すいどう)もつくられました。

こうして運用が始まった玉川上水新水路ですが、この建設は地元の人たちに大きな問題を残しました。新しい水路によって、南北に村が二分されてしまったのです。相互の往来も橋や隧道を使うしかなくなり、不満もでました。

やがて大正10年(1921)の竜ヶ崎地震、大正12年の関東大震災により、新水路は甚大な被害を受けます。そのため甲州街道の拡幅工事にあたり埋設管を設置する工事が決まり、それが昭和12年(1937)に完成すると、新水路は廃止され、その役目を終えました。

現在、新水路の跡地は道路となり、「水道道路」と呼ばれています。また、新水路に架けられた橋は淀橋側から順に一号橋・二号橋と名付けられていたため、いまでも橋のあった場所には「六号通り」「十号通り」と名前が残っています。



今も残る「本町隧道」

林真理子と都市・渋谷

林真理子が昭和 57 年（1982）に発表したエッセイ『ルンルンを買っておうちに帰ろう』はベストセラーになりました。執筆動機は、自身の「まえがき」にあるように、それまでの女性のエッセイに「ヒガミ、ネタミ、ソネミ」の三つが描かれていないことが不服であり、「それがそんなにカッコ悪いもんか」という反骨精神であったといえます。

本書を開くと、コピーライターであった自分自身も含め、スタイリストやイラストレーター、グラフィックデザイナーなど、時代の先端をゆき、若者が憧れるおしゃれな仕事に就く人びとが登場します。多くの読者に支持されたのは、こうした人びとを肯定するだけではなく、どこかシニカルに見ている林真理子の目線でした。

山梨県山梨市の書店の娘に生まれ、大学入学と同時に上京した林は、東京でひとり暮らしをする地方出身者のコンプレックスや孤独を知ることになります。自分自身を取り巻く世界を少し突き放して書いているように感じられるのは、こうした体験によるものなのでしょうか。

たとえば、「タレントやナウい人たちが」集まる原宿の会員制のディスコへ連れていってもらった林は、最新流行の刈り上げヘアに黒に近い口紅を塗って煙草をふかす二人の女性を「悪夢」と評します。また、入社した広告プロダクションで「もっとファッショナブルになって、この業界のヒトっぽくなったら」と言われ、カーディガンにプリーツスカート姿で、オズオズと

原宿のブティックを眺めたといえます。

さらに、「このあいだもキラー通りの某有名パソツショップで、いかにも竹下通りから流れてきたっぽい少女たちに店員がものすごく冷たい対応をしているのを見ちゃった」と揶揄します。

こうした鋭い観察眼は林真理子の持ち味で、昭和 61 年に第 94 回直木賞を受賞した小説「最終便に間に合えば」や「京都まで」でも発揮されています。前者では、ひとり暮らしの都会の女性にとって金銭が恋と同様の重みを持つことをきれいごとを抜きにして綴っています。後者では年下の男性に人生を委ねようとして拒絶され「自分で探し出し、つくり出さなければいけなかったものを、他人におしつけようとした」という女性の嘆きが、芝居の拍子木の音とともに心に響きます。

都市と地方の対立は、近代以降、特に文学の重要なテーマとなりましたが、林真理子の作品にもそれは通底しています。今後も、林が都市の代表ともいえる渋谷周辺をどのように描いてゆくのかが、注目してゆきたいと思います。



『最終便に間に合えば』
文芸春秋
昭和 63 年（1988）



文化財紹介

区指定文化財

「香林院 茶室」

(大正八年)

(平成17年3月24日 指定)

所在地 広尾5-1-21

(香林院 茶室)

香林院茶室は、仰木魯堂（敬一郎）が、大正八年（1919）に自らの茶室として設計施工したものです。魯堂は、次男茂の渡航費用を捻出するために、この茶室を翌九年に売却してしまいましたが、魯堂の弟仰木政齋（政吉。昭和期の代表的な木工芸家にして茶人）が大正十二年（1923）に買い戻し、昭和三十四年（1959）に没するまで茶室及び仕事場として住み続けました。

文久三年（1863）に筑前国（現福岡県）に誕生した魯堂は、明治三十三年に上京し、同四十年に仰木建築事務所を設立し、明治から大正、昭和にかけて、政財界の關係者の住宅を設計しました。

魯堂は近代の茶室に深く関わった人物で、三井財閥の益田鈍翁（孝）や鈍翁の後継者である回琢磨との關係が深まり、回のため茶室を造作しています。大正十四年からは高橋帯庵

（義雄）に協力し、護国寺の茶の本山化に取り組み、多数の茶室、書院の建設に関わりました。

近代の財界人による茶の盛行を主導したのは、三井の頭益田鈍翁であり、高橋帯庵、原三溪らでしたが、魯堂はこの動きに深く関わり、茶人として高い評価を受けていました。

かつて都心にあつた財界人の邸宅内には、茶室がありました。しかし、戦災で多くが焼失し、また戦後の再開発によって多くが壊されてゆきました。魯堂の茶室も多くが失われ、数棟が現存するにとどまります。香林院茶室は、都心の原所在地に残されたものとしては、唯一のものと言えます。本茶室は、明治、大正、昭和戦前期における、財界人による茶の盛行の場として、またその建築を担った人物の作品として、極めて貴重な茶室です。

【今後の展示予定】

◆企画展「渋谷を流れた川の写真展」

平成28年8月13日（土）～10月16日（日）

◆特別展「内田泰夫と渋谷」

平成28年10月29日（土）～平成29年1月22日（日）

◆企画展「なつかしの昭和のくらし」（仮）

平成29年1月31日（火）～平成29年3月26日（日）

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般：100円（80円）／小中学生：50円（40円）

※ 内は10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.32
平成28年8月10日発行